
 学 会 記 事

第37回新潟化学療法研究会学術講演会

日 時 平成10年6月27日(土)

PM 3 : 30 ~

場 所 新潟東映ホテル

1 F 白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) 当科入院患者における MRSA の現況

小野 徹・鳥居 春人 (日本歯科大学新潟
 佐藤 英明・又賀 泉 (歯学部口腔外科学
 教室第2講座)
 影向 範昭 (同 薬剤科)

当科入院患者における MRSA の現況について検討を行った。MRSA 発症患者は15例であり、その発症患者のうち14症例が悪性腫瘍患者であり、ほとんどの症例においては、高齢者や入院期間が長期に及び、種々の治療により免疫能が低下した、いわゆる compromised host であることがあげられた。

口腔・頸部に発症した悪性腫瘍手術症例においては、唾液の停滞、湿潤環境を生じることにより深部感染となり重症感染となることが示唆された。MRSA に対する VCM の投与は有用であったが、いずれの症例においても除菌は難しく、臨床症状の軽快を投与中止の目安にすべきと考えられた。

97年後半期以降の MRSA 検出患者においては、検出時期や薬剤感受性試験の結果より院内感染によるものが考えられ、院内隔離感染予防についての再考を必要と考えられた。

2) 当科入院患者における MRSA 保菌状態と除菌療法の有効性の検討

田邊 嘉也・大矢 聡
 塚田 弘樹・五十嵐謙一 (新潟大学医学部
 第二内科)
 荒川 正昭
 高野 操・尾崎 京子 (新潟大学医学部
 付属病院検査部)

当科における入院患者での MRSA スクリーニング検査、除菌療法の適応を決定し、保菌患者に対する感染

対策を確立するために、東6階病棟に1997年8月1日から11月30日までの期間に入院した患者に対し入院時に鼻腔内と咽頭、及び必要に応じて喀痰の MRSA の検討を行った。MRSA が検出された症例に対してポピドンヨードによる含嗽、ムピロシン軟膏の鼻腔内塗布を施行した。

114例で入院時の鼻腔、咽頭の検索を行い、うち9例で MRSA が検出され、除菌療法施行後陰性化したのは5例であった。(4例は持続保菌状態)

今回の検討期間内には保菌状態から感染症への移行例は認めなかった。今回の検討から保菌状態から重症感染症へ移行する確立は当科においては低いと考えられ入院時のスクリーニング検査の必要性は少ないと考えられた。除菌療法に関しては慢性下気道疾患患者で喀痰に MRSA が検出された患者の場合、除菌は困難と考えられた。

3) MRSA 感染症治療におけるバンコマイシン血中濃度解析の応用

継田 雅美・飛田三枝子
 山田 徹・小田 明 (新潟市民病院
 薬剤部)
 勝山新一郎
 吉川 博子・藤井 青 (同 感染症
 対策委員会)
 丸田 宥吉 (新潟中央病院)

MRSA 感染症治療において、VCM 血中濃度測定・解析を行い、臨床に応用を試みた。

定常状態に達する前の測定で解析し投与方法の変更を提案した症例は7例あり、TDM は有効であった。

TDM の利点として、今後の血中濃度の変動が予測でき、投与量・休薬期間・投与間隔などがシミュレーションできることがあげられる。欠点としては、濃度が低い場合、解析精度がおちることや血清クレアチニン値の変動が大きい患者に対しては長期予測がたてられないことがあげられる。このような特徴を理解した上で TDM を臨床に活用することは有用であると思われる。

4) ABK 使用における、血中濃度測定と TDM の有用性の検討

富岡 千里・長井 一彦 (下越病院薬剤部)
 小川 智・岸本 道美 (同 内科)

【目的】MRSA 感染症に対する、アミノグリコシド系抗生剤アルベカシン(以下 ABK とする)の TDM